

<http://jugyo-jh.com/nihonsi/>

激動の歴史を新しい視点から学ぶ日本近現代史

社会運動の展開

社会運動家荒畑寒村の青春とその時代

社会問題と社会運動(Ⅰ)潜在化する矛盾課題

さまざまな社会問題の存在

社会的格差、社会的差別、劣悪な労働環境

・生活環境(スラム)

人権と自由の欠落(部落差別・家父長的家族制度)

環境破壊(公害など)

地域社会の諸問題(名望家支配・衰退)

地域(ex商店街)の衰退、ジェンダー・LGBT……

⇒経済や社会の変化によって次々に生れ、消えていく

⇒意識されにくい、意識しても抑圧下にあるものも

漠然とした違和感、

自己責任、宿命論(下罪人・「親ガチャ」…)などで

諦める

「長いものには巻かれろ」「分をわきまえる」

労働運動・農民運動

市民運動(住民運動)

学生運動

民主化運動・反戦平和運動

反公害運動・環境保護運動

民族(解放)運動

女性解放運動・LGBT解放

人権擁護運動

(部落解放・公民権運動)

宗教運動

消費者運動(生協運動)

*

ファシズム運動

民族排外・浄化主義運動

*

健康増進運動

地域おこし・まちづくり

暴力追放・地域浄化運動

もったいない運動

社会問題と社会運動(2)可視化と運動化

出発点におけるさまざまな矛盾の存在

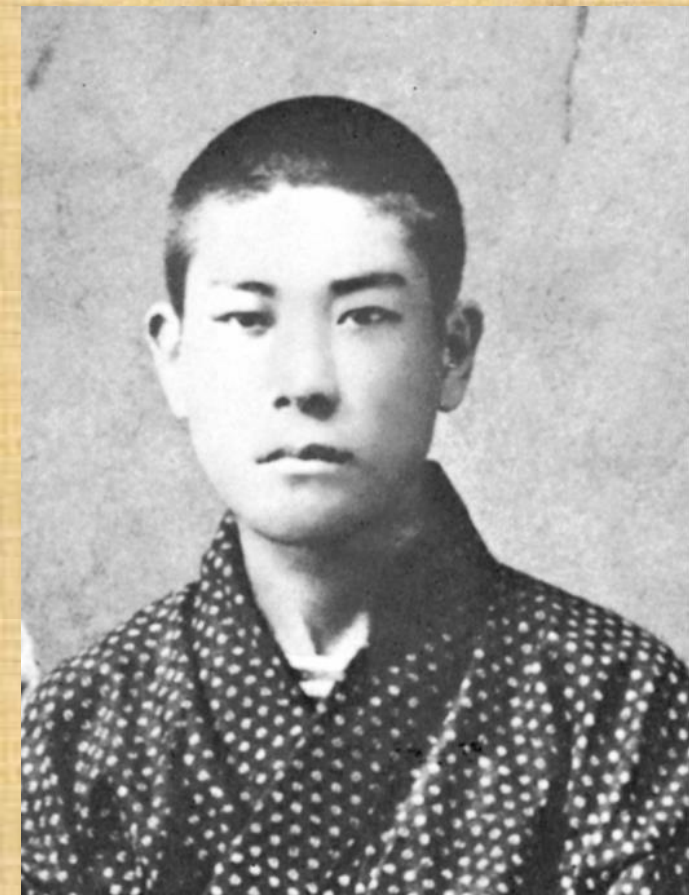
漠然とした違和感の広がり、他方でのあきらめや権威的支配

問題を可視化し、運動化するうえで…

- ・ **ヨソモノ**…問題を冷静に分析し可視化する（学者・理論家）
- ・ **バカモノ**…従来のありかた・やり方や既成概念への疑問を提示し、代案を提出（思想家・「突破者」）
- ・ **ワカモノ**…地道な活動を展開する運動を実行していく（運動家・活動家）

馬鹿者？わかもの？

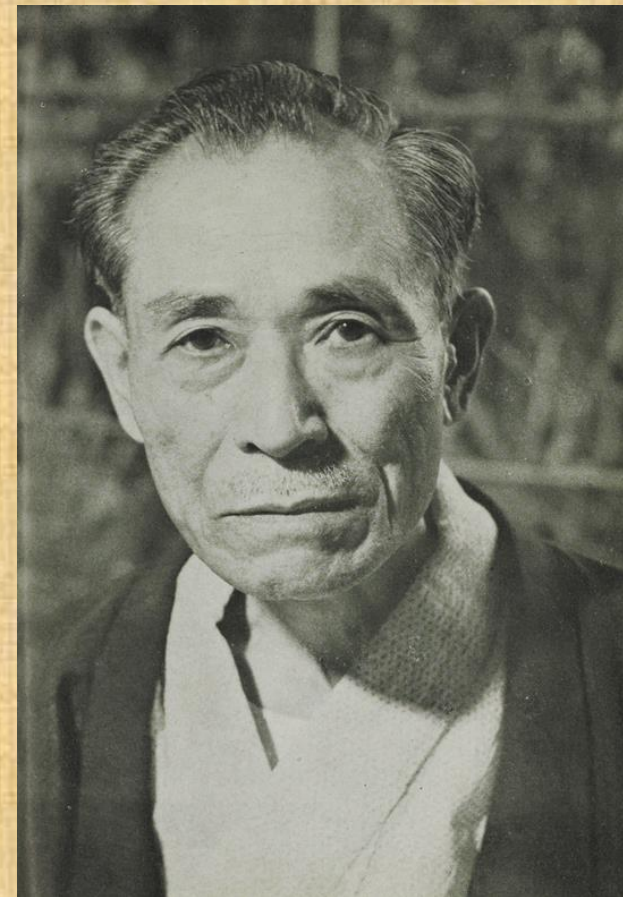
荒畑寒村（勝三） 1887（M20）～1981（M56）



17歳の荒畑寒村

- 1) 平民社時代から社会主義運動に
- 2) 足尾鉍毒事件＝「谷中村滅亡史」出版
- 3) 大逆事件の死刑囚・管野スガの元夫
- 4) 「冬の時代」に「近代思想」を出版
- 5) 第一次日本共産党創設関与、ソ連に
- 6) 堺利彦・山川均らと『労農』を創刊
- 7) 人民戦線事件で逮捕⇒敗戦は牢獄で
- 8) 戦後・日本社会党結成に尽力

戦後初の選挙で衆院議員に(2期)



晩年の荒畑寒村

荒畑の少年時代

1887**横浜遊郭**内の料理店（引手茶屋）で誕生。（御家人の家系）

5才まで里子に出される。

私立の尋常小学校、ついで公立の高等小学校を卒業

- ・日清戦争に感動、三国干渉に怒る、中国人への親近感
- ・義和団に同情しロシアの暴虐に反発

⇒「**偏狭盲目な忠君愛国に染まっていた**」

- ・高利貸の平沼専蔵の暗殺を計画

卒業後、海軍を志願するが外国人商会に就職

- ・**キリスト教会**に出入りし、洗礼を受ける

⇒しだいに内村鑑三の主張に惹かれる

- ・北千島開拓をめざす報効義会に入会、

報効義会の紹介で**横須賀海軍工廠・見習い職工**に



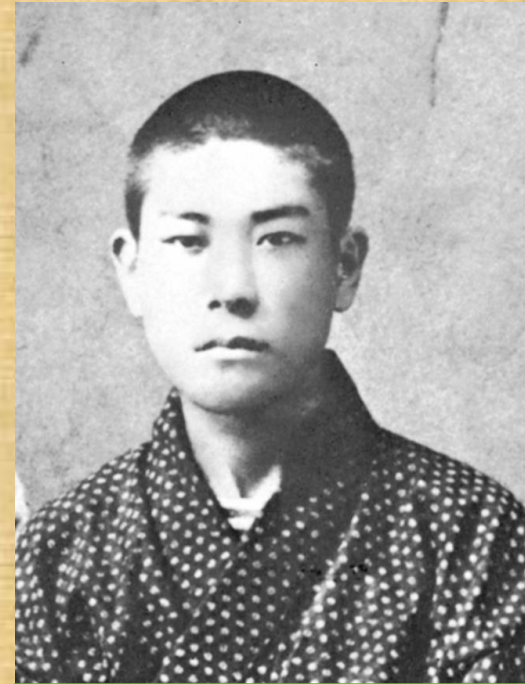
軍需工場の過酷な労働

～開戦直前の横須賀海軍工廠～

(明治36年の) 夏に入ると工廠の作業はにわかに繁忙を加えるようになった。(中略) 職工は昼夜兼行、わずかに深夜二時間の仮眠を取るのを許されたにすぎない。

弁当なども深夜に食う分を加えて一日4回ずつ家族に運ばせ、数日間ぶっ通しの昼夜連続作業にもうこれ以上働けないほど疲労したとき、やっと帰宅を認められた始末であった。(中略)

徹夜不眠のために疲労の極みに達した職工たちは木材を担いだまま、何かにつまづいて倒れるなり死んだように昏睡してしまった例は、私たちはしばしば目撃した。(「寒村自伝」)



荒畑寒村 17歳

過労死と労災事故

～日露戦争前後の軍需産業

①生産の飛躍的拡大を至上命令とする

⇒1904年3月～労働者大量動員に踏み切る

＜大阪砲兵工廠＞8473人⇒20601人(05/8)

囚人・未成年(4240)・女性(4060)

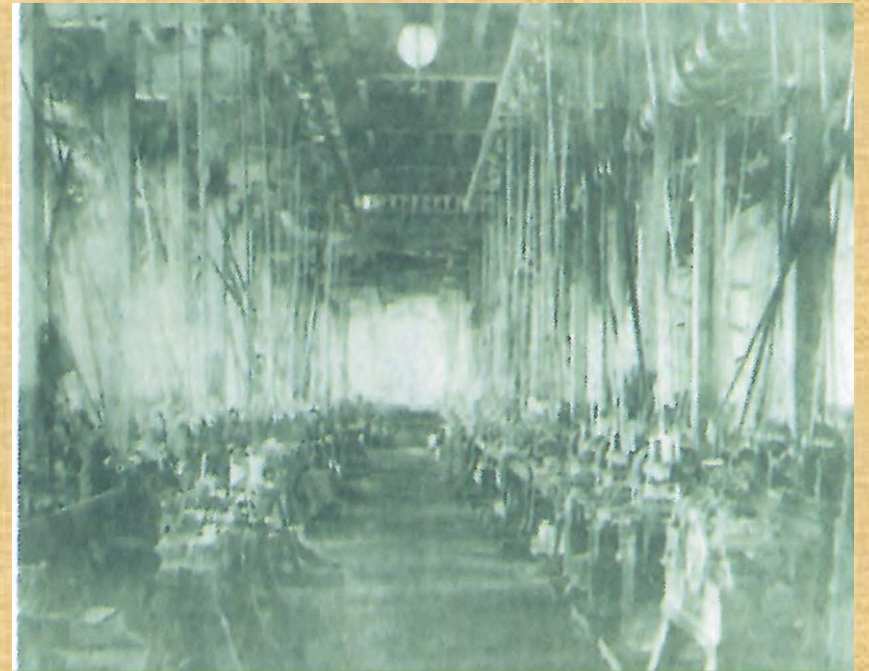
②1903年12月～24時間フル操業の開始

⇒過労死と労災事故、火災などの続出

③戦争後の大規模リストラ

⇒大労働争議（東京・呉）の発生

大阪砲兵工廠…憲兵・警察の介入で未遂に



大阪砲兵工廠

荒畑、社会主義に開眼

～幸徳・堺『退社の辞』の衝撃～

「下宿屋から届けられた弁当箱を包んだその日の『万朝報』をひろげて読んでいる内に、突然火花が目を射たような衝撃を感じた」秋水先生、枯川先生、連署の「退社の辞※」が載っていたのである」

「もし私が海軍造兵工廠の職工とならず……、開戦直前の過激な作業と職工の劣悪な状態を経験する機会を持たなかったならば……その信者とはならなかったかもしれない。だが、日露戦争の危機に際して起こった非戦論の主張に対する共鳴同感は、私の生活体験方、生じた感傷と漠然たる憧憬とを、将来の運命を結滞させるに至った理想と情熱とに燃え上がらせたのである。」

⇒社会主義の演説会を傍聴、社会主義協会に入会・平民社の出入りし始める



横浜平民結社結成の日
(1904年8月)
中列左から二人目が荒畑

* 「萬朝報」退社の辞 堺利彦・幸徳傳次郎

明治三十六年(1903)十月十二日号



万朝報 よろずちょうほう
明治25年(1892)黒岩涙香
が創刊した日刊新聞。
第三面に社会記事をはでに取り
扱い「三面記事」の語を生む。
内村鑑三・幸徳秋水らも在社
して労働・社会運動に関心を
示し、日露開戦に反対したこと
で知られる。

堺 利彦
幸徳傳次郎

予等二人は不幸にも対露問題に関し
て朝報紙と意見を異にするに至れり。
予等が平生社会主義の見地よりし
て、国際の戦争を目するに貴族、軍人
等の私闘を以てし、国民の多数は其
為に犠牲に供せらるゝ者と為すこと、
読者諸君の既に久しく本紙上に於て
見らるゝ所なるべし。然るに斯くの如
く予等の意見を寛容したる朝報紙も、
近日外交の時局切迫を覚ゆるに及び、
戦争の終に避くべからざるかを思ひ、
若し避くべからずとせば挙国一致当
局を助けて盲進せざる可らずと為せ
ること、是亦読者諸君の既に見らるゝ
所なるべし。

此に於て予等は朝報社に在つて沈黙
を守らざるを得ざるの地位に立てり、
然れども長く沈黙して其所信を語ら
ざるは、志士の社会に対する本分責
任に於て欠くる所あるを覚ゆ、故に
予等は止むを得ずして退社を乞ふに
至れり。

黎明期の社会運動と「平民社」



社会民主党創立発起人

左から安部磯雄・河上清・幸徳秋水・木下尚江・片山潜・西川光二郎



平民新聞編集部

左から幸徳秋水・堺利彦・石川三四郎・西川光二郎・垣内武次郎

黎明期の社会運動～労働問題・運動を中心に

1873 三池炭鉱紛争*暴動化

(1880ごろ～自由民権運動の高揚)

1883 三池炭鉱囚人労働者暴動・高島炭鉱暴動

1886 甲府・雨宮製糸場の女エスト*

1889 高島炭鉱の鉱夫虐待が社会問題化

大阪天満紡績職工賃上げスト

鉄工の同盟進工組(職工の同業組合的)結成

1891 田中正造、足尾銅山鉱毒事件につき質問書提出
高野房太郎、アメリカで職工義友会結成

1894 日清戦争(～95)

1896 名古屋・三重紡績職工スト



炭鉱ではこうした過酷な労務管理(リンチ)が横行した。

(※塩田庄兵衛『日本社会運動史』より作成)

*鉾山・炭鉾業



◎鉾山・炭鉾…鉄や非鉄金属の原料を採掘

- ① 1880～払い下げにより政商・財閥の経営に
→ 1913年には優良鉾山はほぼ大企業の支配下に
- ② 銅と石炭が中心→主要な輸出産業に
- ③ 労働災害の頻発…落盤・ガス爆発・塵肺珪肺など
福岡での炭鉾事件の死者 469人/年(1905～12)
- ④ 前近代的な労働環境＝飯場制度・納屋制度
…請負人が募集・生活管理・作業監督などを請負う
→ 前貸金・物品貸与・賭博、リンチなどで支配
- ⑤ 公害問題の発生＝足尾鉾毒問題・別子煙害事件など

前近代的・非人道的な労働環境が凝縮した職場



採炭は二人一組で行われる。先山が石炭を採掘し、後山がそれを運び出した。後山は女性であることも多かった。

*女工の職場＝苛酷な労働環境

①未成年の少女が中心

- ・紡績…都市の貧困層が中心、のち農村へ
悪評の広がり⇒募集難に
→のち沖縄出身者や朝鮮出身者が増加。
- ・製糸…貧農の子女を前貸金でしばり雇用
口減らしの面も

「うちが貧乏で、十二の時に、売られてきました、この会社」

②長時間労働…12時間以上

引用例：6時から6時、昼夜二交代制1週間交替。

製糸工場の例：1日14～5時間、長いときは17～8時間

③劣悪な労働・生活環境

高温多湿、綿くずの飛散、労災発生

食料も不十分⇒脚気や結核が蔓延

「工場は地獄、主任は鬼で、回る運転、火の車」



大阪紡績での女工の年齢構成
20歳以下が6割、14歳未満も15%をしめる。実態はさらに厳しいとの指摘もある

製糸業女工の一日



(『長野県立歴史館展示案内』による)

*女工たちの職場 ～離職・健康破壊・抵抗

- ④ 寄宿舎生活＝隔離され監視された生活
一人あたり0.7～1畳分、布団の共有も。

「籠の鳥より、監獄よりも、寄宿暮らしはなお辛い」

- ⑤ 大量の離職・逃亡者・健康破壊

ある例：退職者2162人

→逃走828人、病氣帰休118人、死亡者7人

- ⑥ 日本初のストライキ

1886山梨・雨宮製糸

「女工女工と軽蔑するな、女工は会社の千両箱」



上..映画「あゝ野麦峠」
左..工女虐待事件を記した
当時の新聞記事(時事新報)

社会運動の広がり

97 足尾銅山鉍毒被害者700人、大挙上京請願

職工義友会「職工諸君に寄す」発表

松本で普通選挙期成同盟会結成（99東京でも）

7, 労働組合期成会*結成 12, 鉄工組合結成

12, 片山潜『労働世界』創刊

98 2, 日本鉄道機関士スト

10, 社会主義研究会結成（00社会主義協会に）

99 横山源之助『日本の下層社会』出版

1900 2, 鉍毒被害民三千人の上京を阻止（川俣事件）

治安警察法制定*、立憲政友会結成

01 5, 社会民主党*結成、政府から禁止される

12, 田中正造、足尾鉍毒問題を直訴



「労働世界」創刊号
労働組合結成促進の準備会として高野房太郎や片山潜らが結成した労働組合期成会の機関紙の性格を持つ。99年には加入者が5700名に拡大、影響下に鉄工組合、日本鉄道矯正会、活版工組合が結成。

*労働組合期成会（1897～1901）



- ①労働組合結成促進のための準備会。
- ②日清戦争後の自然発生的なストライキが頻発した状態を背景に
- ③アメリカから帰国した城常太郎，高野房太郎，片山潜などが
97年4月結成した職工義友会を母体に改組設立した。
- ④片山潜の『労働世界』が事実上の機関紙
- ④演説会、地方遊説などのなかで、会員は発足当時1200名から99年には5700名と拡大した。
- ⑤このなかで鉄工組合，日本鉄道矯正会，活版工組合が結成される。
- ⑥治安警察法制定後の弾圧の中、会員は減少，01年自然解消。



『労働世界』創刊号

治安警察法（1900（明治33）年制定）

①第2次山県有朋内閣下で制定された労働・社会運動弾圧法

⇒自由民権運動に対する弾圧諸法規を集大成した

※のちの治安維持法とともに社会・労働運動取締りの法的根拠となった
(1945年10月廃止)

②おもな内容は、

- (1) 政治集会の開催、政治結社結成の届出制、
- (2) 集会での発言に対する制限や、警察官の監視など解散
- (3) 軍人・宗教家・教員・学生などの政治結社加入禁止
女性・未成年者は集会参加も禁止
- (4) 労働・農民運動抑圧
＝組合結成の制限・ストの扇動禁止など



*社会民主党の結成(1901)

日本最初の社会主義政党。

明治34（1901）年5月18日、安部磯雄、片山潜、西川光二郎、木下尚江らが結成。

同党は人類平等、軍備全廃、土地・資本の公有などの「理想綱領」8か条と貴族院廃止、普通選挙実施、治安警察法廃止などの「行動綱領」28か条を掲げた。

これらが新聞に掲載されたことは、政府を刺激、2日後禁止された。

主唱者6名のうち5名までがキリスト教徒。



社会民主党創立発起人 左から安部磯雄・河上清・幸徳秋水・木下尚江・片山潜・西川光二郎 『幸徳秋水全集』補巻（大逆事件アルバム 幸徳秋水とその周辺）所収

足尾鉍毒問題～深刻な被害

古河市兵衛経営の足尾銅山での公害問題。

<主な被害>

- ①煙害、乱伐などによる山林の荒廃
- ②山林の荒廃による大洪水の頻発
- ③有毒重金属などを含む廃水の垂れ流し
- ④渡良瀬川の漁業被害～鮎大量死など
- ⑤洪水による鉍毒の拡散

- ・流域の広大な農地と農作物への鉍毒被害

⇒1府5県, 11万9千戸, 51万7千人、10万町歩ものの被害,

- ・流域住民の健康被害⇒出生率低下と死亡率上昇など

<波及した問題>

- ・遊水池とされた渡良瀬川下流・谷中村の廃村化



足尾銅山

*足尾鉍毒事件（被害拡大と農民の抵抗）

1877 古川市兵衛、足尾鉍山の経営権取得、操業開始

84 足尾鉍山、生産量日本一の銅山⇒ 精錬所周辺の樹木の立ち枯れ

85～ 渡良瀬川の魚類大量死はじまる

90,8 渡良瀬川大洪水⇒ 栃木・群馬両県1650町歩で鉍毒被害

91 田中正造、国会で鉍毒問題について初質問

96,7～9 渡良瀬川大洪水＝鉍毒被害1府5県，4万6千町歩

97 被害民第1・2回大挙請願行動（押出し）

98,3 渡良瀬川大洪水⇒ 沈殿池決壊・被害の拡散

⇒ 第3回押し出、田中の説得で帰国

00,2 第4回押し出で逮捕者100余名に（川俣事件）

01,10 田中、衆議院議員辞職⇒ 12 明治天皇へ直訴

⇒ 鉍毒世論の沸騰、救済運動、都下学生の被害地視察

足尾鉍毒問題～田中正造と公害反対運動※※

<不十分な対策・政策>

- ①第一次鉍毒調査会→鉍毒予防工事命令
⇒不完全な対策と工事のみ
- ②第二次鉍毒調査会
⇒問題を治水問題へのすりかえと農民の分断
⇒1907年**谷中村を廃村・遊水池化を強行**

<被災者/田中正造の運動>

- ①田中正造による国会での発言・質問書・意見書
- ②**被害者による大挙上京請願行動(押出し)の実施**
- ③川俣事件…「押出し」への厳しい弾圧、100人余が逮捕される
- ④田中正造の議員辞職、**天皇直訴**⇒鉍毒世論の沸騰
- ⑤1904～田中正造、**谷中村で廃村反対運動**を続行



田中正造（1841－1913）
衆議院議員。足尾銅山鉍毒問題で奮闘、34年議員を辞職、明治天皇に直訴。のち谷中村に居をうつし、同村の強制買収、遊水池化計画に抵抗した。

*足尾鉍毒事件（田中正造と谷中村）

- 90 第一回総選挙・田中正造当选(以後6期)
渡良瀬川大洪水→鉍毒被害顕在化
- 91 田中正造、鉍毒問題について質問書提出
- 96 渡良瀬川大洪水をくりかえす
- 97 政府、調査委員会を設置⇒答申案提出
- 01 明治天皇直訴事件⇒鉍毒反対の世論の沸騰
- 02 政府、遊水池計画を推進
- 03 調査報告書提出⇒遊水池・地租減額・北海道移住など
田中、応援演説で軍備全廃＝「無戦論」を演説
- 04 田中、谷中村に寄留/栃木県会にて谷中村買収案通過
- 06 谷中村の仮堤防破壊
- 07 家屋の強制破壊 /荒畑寒村「谷中村滅亡記」
- 13, 9 田中、胃がんにて死亡

平民社の設立…非戦論と社会主義

①1903(M36)年10月、万朝報を退社した幸徳秋水・堺利彦が『平民新聞』(週刊)創刊

⇒発行所が平民社を設立

平和主義(非戦論)と社会主義を主張

②その後、石川三四郎、西川光二郎らも参加

③社会主義協会と提携、社会主義演説会・講演会開催、地方遊説、『社会主義入門』、木下尚江『火の柱』など15冊の平民文庫を発刊、伝道行商なども実施した。

④数千人の読者を得たが、しばしば弾圧を受ける。

⑤財政難のうえに思想的対立も顕在化

⇒1905年1月《平民新聞》を廃刊、

⇒後継の《直言》も無期限発禁

⑥1905年10月解散した。



平民社同人宣言(1903 M36)

宣言

一、自由、平等、博愛は人生世に在る所以の三大要義也。

一、吾人は人類自由を完からしめんがために平民主義を奉持す、故に門閥の高下、財産の多寡、男女の差別より生ずる階級を打破し、一切の压制束縛を除去せんことを欲す。

一、吾人は人類をして平等の福利を享けしめんがために社会主義を主張す、故に社会をして生産、分配、交通の機関を共有せしめ、其の経営處理一に社会全体の為にせんことを要す。

一、吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんがために平和主義を唱道す、故に人種の區別、政体の異同を問はず、世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す。

一、吾人既に多数人類の完全なる自由、平等、博愛を以て理想とす、故に之を實現するの手段も、亦た国法の許す範圍に於て多数人類の与論を喚起し、多数人類の一致協同を得るに在らざる可らず、夫の暴力に訴へて快を一時に取るが如きは、吾人絶対に之を否認す。

平民社同人



平民新聞の内容から

○論説

- ・ 非戦論(「戦争来」)「トルストイ翁の戦争論」

- 「日露社会党の握手」「小国論」

- ・ 「共産党宣言」・ 社会主義・ 移民・ 朝鮮併呑論・ 自由恋愛

○世界の新聞…各国社会党動向・各国事情・婦人選挙権

- ・ 仲裁裁判所

○日本の新聞…労働者の待遇運動(工女の虐待・同盟罷業)、

- ・ 戦時下の国民生活・物価・自殺者の数、部落問題

○文壇・演壇…内村鑑三・海老名弾正・谷干城・板垣退助

○詩歌 ○小説…中里介山・トルストイ・木下尚江

○同志の運動…伝道行商・遊説会・談話会・演説会

○雑…予はいかにして社会主義者となりしや・東京の木賃宿



314 「トルストイ翁の日露戦争論」 1906

日露戦争下の国民と「非戦論」



社会主義伝道行商日記

荒畑寒村編

解説 平田順



熱狂する「国民」？

1) 戦勝祝賀行事などのイベント開催

⇒全国で開催・東京では10～20万人動員

日の丸と万歳・提灯行列、花火と接待

「国民」としての一体感、「日本人」意識の高まり…

2) 非戦論やキリスト教徒⇒「露探」攻撃

中国人や朝鮮人に対する差別と偏見

3) 国民の戦争協力

重税や国債、寄付や徴用

出征兵士の歓送迎・慰問

戦病死者への弔魂儀礼



日本海海戦の勝利を祝賀する横浜

過熱するメディア

新聞・雑誌＝人々と戦争をつなぐ経路に

1) 開戦前は主戦論・強硬論で開戦を煽る

『万朝報』…非戦論から開戦論へ

2) 戦況の速報・従軍記者のルポ

「人々は戦況を知り一喜一憂した。」

⇒新聞・雑誌を購読する慣習が広まる

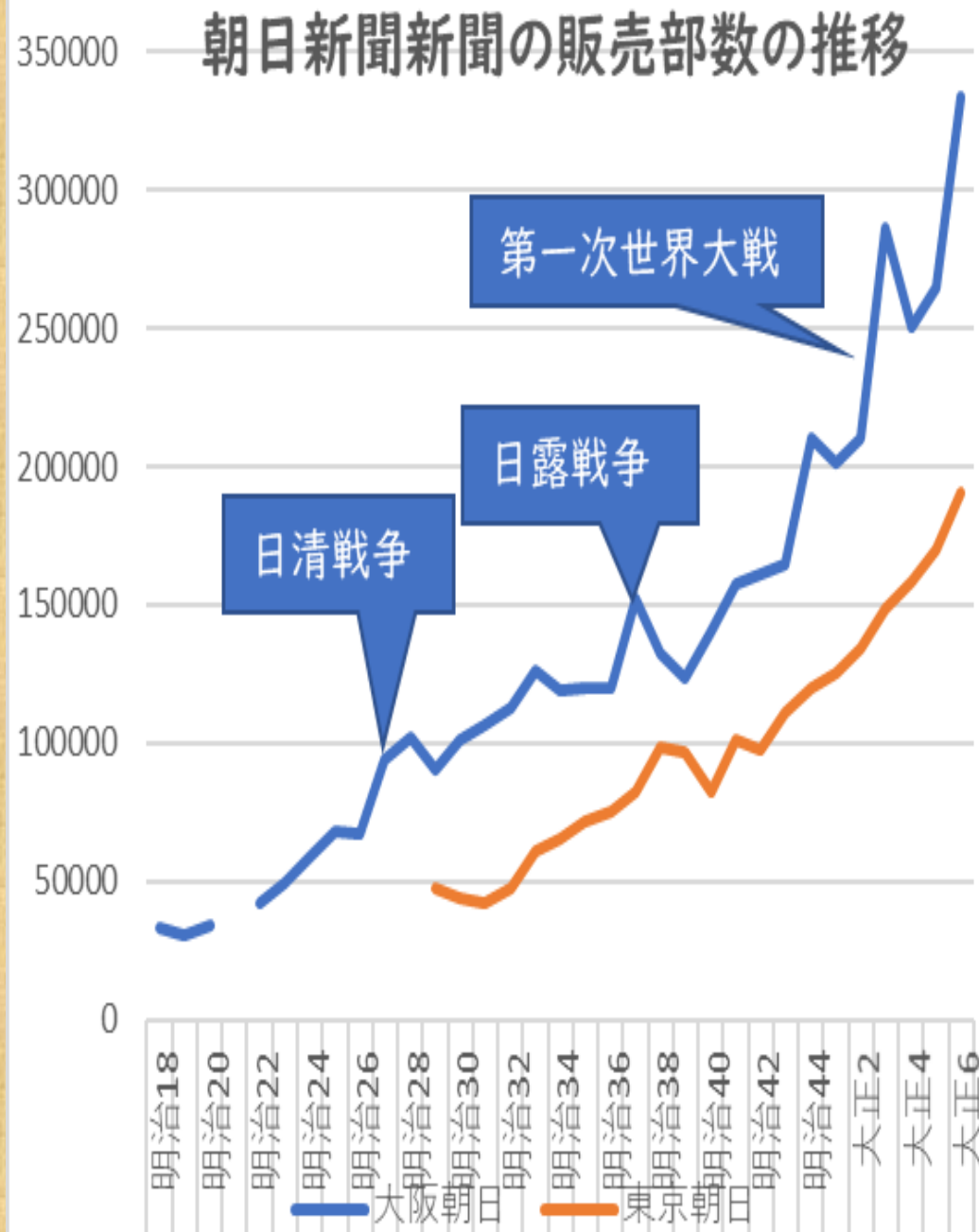
3) 『号外』の発行

⇒街頭が戦況を知るための情報空間に

4) 「政論新聞」から「民衆新聞」へ

『万朝報』『二六新報』/『朝日新聞』

5) 結果として発行部数の急増などが



国民への経済的負担の強まり

戦前から強まっていたが開戦によって…

①増税⇒税収の負担は約2倍に

1) 間接税（塩・タバコ・砂糖消費税など）

物価高騰をまねく

2) 直接国税の増加＝地方税の歳入減をもたらす。

教育費や道路整備費など生活関連費用の減少

②内国債＝約6億円

一戸一戸にわりふり、戸別訪問で各戸に「勧誘」を

ノルマ・競争・「その筋」の協力

③寄付や協力要請

⇒戦死者や出征者家族への義捐金・祝賀会・
葬儀費用などを賄う。

戦費の調達

(単位：万円)

臨時軍事費の財源(予算)内訳					
ない	さい		がい	さい	
内	債	・	外	債	13億1354
一	時	借	入	金	1億7888
一	般	会	計	繰	替
(非常特別税を含む)					1億8900
特	別	会	計	資	金
繰入					6300
軍	資	献	納	金	150
雑		収	入		50
合 計					17億4642

戦争が引き起こす「悲劇」

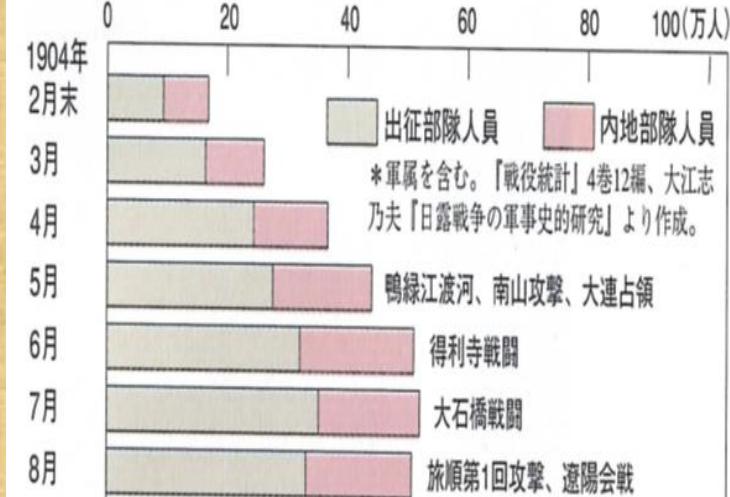
～広がる厭戦意識

①戦死者・戦病死者・負傷者の大量発生

②戦場・銃後の過酷な実態

③出征が引き起こした悲劇

- ・子どもたちを殺した
シングルファーザーの兵士
- ・徴兵逃がれの若者
- ・乞食となった母子
- ・一家心中していた家族



常昌寺の軍人木造仏

そもそも

国民は「開戦派」だったのか？

原敬の証言（開戦直前）

「今日の情況にては国民の多数は心に平和を望むもこれを口外するものなく・・・少数の論者を除くのほかは内心戦争を好まずして而して実際には戦争に日々近寄るものの如し」

（原敬日記 1904・2月5日）開戦決定の翌日！

陸軍参謀本部員の回想

「民間の世論は、七分三分でありまして、戦争をしては行かぬという方の論が強かったのです」

⇒開戦後、こうした意識は変わったのか

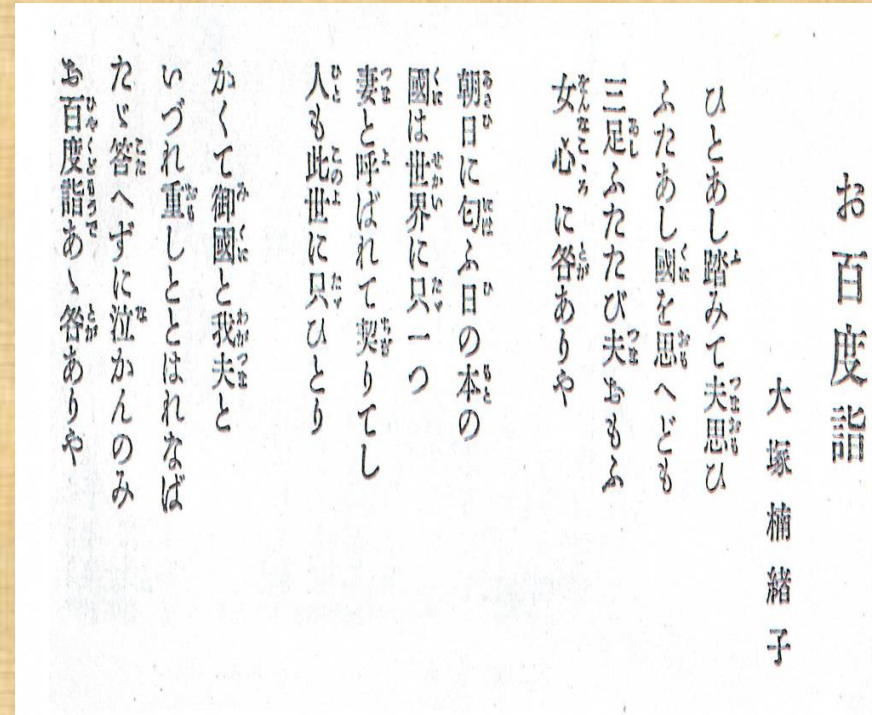


原敬（1856～1921）新聞記者・外交官などを経て政治家へ。古河鋳業の副社長でもあった。本格的政党内閣を組閣するが暗殺された。

さまざまな非戦論（小松裕による分類）

- ① **階級的観点**に立つ非戦論…平民社など
- ② **キリスト教人道主義**や**トルストイ主義**に立つ非戦論
…内村鑑三※・木下尚江など
- ③ **いのちの観点**に立つ非戦論
…田中正造※**戦死者も鉋毒被害者も「非命の死者」**
- ④ **肉親愛**に基づく非戦論（厭戦論）
…与謝野晶子 「君死にたまふ事なかれ」 *
大塚楠緒子「お百度参り」など
- ⑤ その他

…宮武外骨「未亡人論」＝戦争未亡人への貞操強要の「偽善」を批判
二木りん子「一軒家」＝部落住民の立場から挙国一致のまやかしを描く
矢部喜好の良心的兵役拒否＝『殺すなかれ』の教義から召集を拒否・入獄
※内村鑑三や田中正造は日清戦争を肯定していた。



*戦争への疑問 与謝野晶子「君しにたまふ事なかれ」

あゝをとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、末に生れし君な
れば

親のなさはまさりしも、
親は刃（やいば）をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。

堺（さかひ）の街のあきびとの
舊家（きうか）をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとも、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戦ひに
おほみづからは出でまされ、
かたみに人の血を流し、
獣（けもの）の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思（おぼ）されむ。

あゝをとうとよ、戦ひに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守（も）り、
安（やす）しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻（にひづま）を、
君わするるや、思へるや、
十月（とつき）も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ。

平民社の社会主義伝道行商

04/10～05/1（114日間） 小田頼蔵・山口孤剣）

平民新聞と書物をつんだ箱車を引き、社会主義の宣伝を
東京～下関間の行商を行う。

社会主義協会員65人、演説会・談話会18回

販売部数1097冊



社会主義伝道行商
左が山口義三（孤剣） 右が小田頼造

*****10月の日記より

- ・ 20 静岡県の小学校訪問、校長「社会主義には大反対」
徒歩で求職のため東京に向かう労働者2人に社会主義を説く
- ・ 21 社会主義者の理髪店（「平民床」）訪問、店内に新聞や櫛を置く
- ・ 23 演説会開催、暴漢乱入演説を妨害、警官の願いで短縮
- ・ 24 教会への投石・信者減少の話、夫の死で発狂した妻の話
出征軍人の母親が2・30人裸足参拝をしている話など聞く

荒畑青年の第一回東北伝道行商

05/4/5～5/13 (39日間)千葉・茨城へ

「私の出で立ちは黒い詰め襟の洋服に脚絆わらじ、両側には社会主義書類伝道行商、背面には東京市有楽町平民社と白く抜き、箱の上には洋傘一本をくくりつけた赤塗りの箱車を引いている」

⇒新聞の読者やキリスト教関係者などにも宿泊しつつ行商、書籍など278冊販売

⇒茨城に入ると尾行の巡查がつくようになり、立ち寄り先にも警察が先回りし「金銭を強請る」など干渉強まる。

⇒車が壊れたため東京に戻る



第2回東北伝道行商(埼玉～栃木)

05/7/10～7/30 埼玉・栃木など(47冊)

14～谷中村で田中正造と出会う

「忘れられたる谷中村」の記事を「直言」に

16・警察チラシを配布すれば禁固になると通告

19～足尾鉾山へ

永岡鶴蔵ら労働至誠会の鉾夫と交流、状況調査

24・日光(華厳の滝)で自殺者と間違えられ

29・友人・鈴木秀夫、戦死の報を聞き、横浜に

9/5 講和条約反対国民集会

⇒日比谷焼き打ち事件発生



307 田中正造 1912年10月に撮影された写真をもとに1959年制作。小口一郎画。

講和条約反対運動と動き出した民衆



講和条約反対と日比谷焼打ち事件

- ①ポーツマス条約締結
- ②新聞各紙は条約締結に強く反対
⇒大キャンペーンを実施
- ③9月5日、東京・日比谷公会堂で「講和反対国民大会」を開催
- ④警察の規制をきっかけに群衆が暴徒化
⇒警察署や派出所・交番、国民新聞、内務大臣宅、キリスト教会や市電なども襲撃、焼き打ちに
- ⑤戒厳令の発令、全国化も



9月5日、東京・日比谷公園で野党議員ら「講和反対国民大会」を企画、これを禁止、阻止しようと入り口を封鎖した警官隊と参加者が衝突した。大会は開催された。その後、参集した群衆が新聞社や警察署、派出所などを襲撃する。

講和反対国民大会主催者の述懐

昨年のポーツマウス条約の締結の報が伝わりました時分に、日本全国いずれの所にもモウ戦争は嫌になった、戦争で死ぬのは犬死である、と云うような、実に不都合極まる、不祥極まる言葉を聞きましたのであります。其当時吾々はこの言葉を聞いて非常に心配し、且つ非常に恐れました。

国民が戦争に行くことに嫌になり、死ぬることが嫌になるというようなことでは、国の基礎というものが破壊せらるるといわなければならない。

(小川平吉『嗚呼九月五日』)

⇒国民大会は講和条約反対が真の目的だったのか

⇒国民のなかの反戦・反軍意識への警戒



小川平吉（1867～1942）
政治家。長野の生まれ。政友会。極端な国粹主義者で日比谷焼き打ち事件のきっかけを作る。のち司法相、鉄道相。

条約に反対する「国民」の声 戦費と兵卒は誰が出したんだ。

いったい、政府は国民を何と思っているのだろう。

戦費を出させるときは議会だとかなんとか騒いで金を出させて、

戦に勝ったときには乃公（だいこう）のお手柄といわんばかりに自慢してさ。

それはまだしも肝要の講和条件となると独断でやって、

おまけにろくでもない結果を国民に負担させる。

戦費と兵卒は誰が出したんだ。



北沢楽天「増税にあえぐ庶民」
1908年5月20日「東京パック」

傷痍軍人の投書

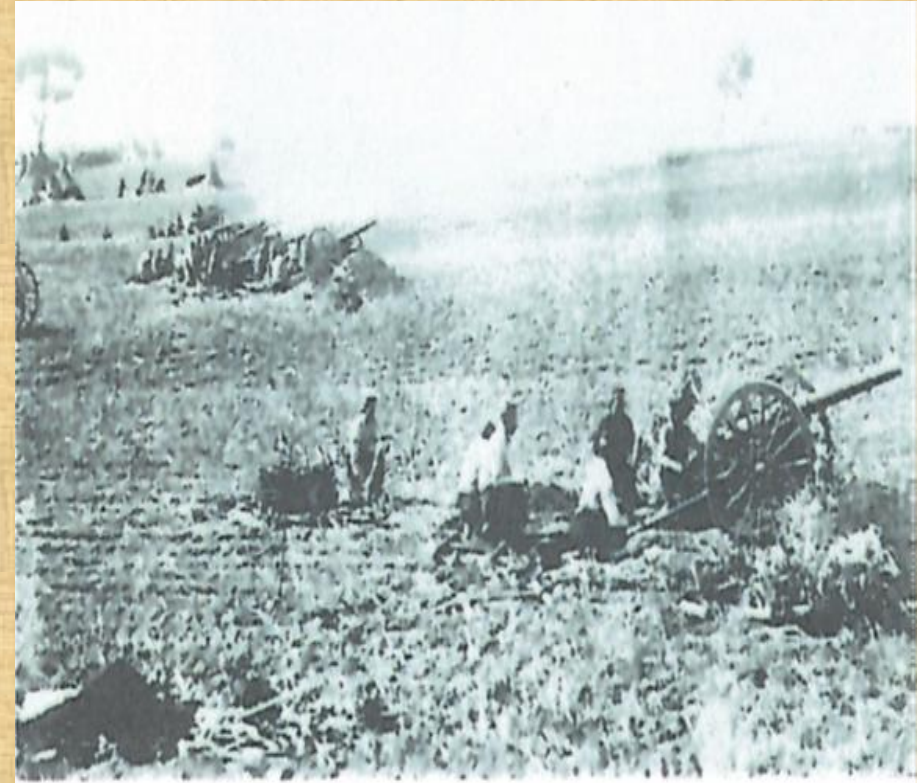
これほど馬鹿らしきはなし。俘虜になれ！

私は後備兵であります。

沙河の戦いで片足を失って参りました。私の弟は現役兵で昨年大石橋にて戦死しました。（中略）

兵隊程馬鹿らしいものはありません。堅く子孫の末まで申し伝えておきます。必ず兵隊に取られぬように平素神仏に祈願いたしておけ。而して不幸にも兵隊に取られて戦争に行くことがあっても、必ず敵に手向かいいたさず、第一番に俘虜になれと

（東京朝日新聞、9月5日）



沙河の戦い(04年10月)

神奈川某村有志一同の申し合わせ(9/5) 政府には一切協力しない！

我等同村の有志は一同申合せ、今後戦争の相起り候とも、兵役の召集は勿論、国債の募集にも一切応ぜざる決議を致し候。

もしこれがために露探などと罵られることこれありそうらわば、露探の好模範は誰が示したるぞとやりかえす覚悟に候
(『東京朝日新聞』九月五日投稿)

⇒政府こそが『露探』との論理



平民社がみた日比谷焼打事件

政府への深大な怨恨が破裂爆発した！

吾人の観るところをもってすれば、彼らの中、誠意熱心なる条約破棄論者無きにあらざると同時に、また必ずしも条約破棄をもって唯一無二の目的となすにあらざるもの極めて多きをしる。…

聴けよ当局者、日本国民はその男女老若を問わず、一人として深大の怨恨を諸君に抱懷せざる者はなかりし也。新聞紙が大活字を羅列して諸君を讚美謳歌しつつあり戦勝泰平の時期において、彼ら国民の間には無限悲憤の熱涙を諸君のために拭いしつつありなり。彼らの諸君に対する怨恨は、講和の条件によつて醸成されたるにあらずして、その強いて抑え来たれる怨恨の、戦争終結を待って破裂爆発したのみ。『直言』（9月10日・32号）

⇒人々の怒りの真の対象は政府なのだ！

荒畑、横浜で講和賛成演説会を開催

寒村ら曙会…横浜市内で講和賛成の演説会を開催。

入りきらない群衆は十重二十重に会場を取り巻き、警察官との間で小競り合いを演じ、投石するものもあったが

「私が戦争反対の立場から講和賛成の趣旨を明らかにし、ただ和戦二つながら国民の意思を無視するの非を攻撃し、

国民は普通選挙権を得て国政に参与し、その総意によって和戦を決定するの権利を得なければならないと説くと、

聴衆は最も同意を表す拍手を送った。」

実際に一人として私たちに敵意を示すものはなかった。



戦死した横浜平民結社の親友鈴木秀夫(右)とともに

社会運動の危うさ

大阪朝日新聞、「白骨の涙」の危険性

「白骨の涙」…「戦争における犠牲を無駄にするのか」との問いかけ。

①戦争は日本は必ず利益を得なければならない。さもなくば、**兵士や国民の犠牲を無駄にしたとみなされる。**

②戦争で得たものの放棄も同じ論理で攻撃される。

③「白骨の涙」の論理は、五十年戦争を生み出す論理となっていく。

⇒以後、日本帝国は「日清・日露戦争での血の犠牲」という怨霊に取り憑かれる。



ポーツマス条約を報じた
大阪朝日新聞

戦争・兵役を肯定

国家のための死＝「戦争の死」を神格化

①戦死者は、国家のため、天皇のための名誉ある死者として、靖国神社の祭神として祀られ、天皇も参拝する。

②都道府県には招魂社、村々には忠魂碑

⇒郷土の英雄として慰霊・顕彰する。

③戦場につれだされる兵士にとっても、こうした施設は、みずからの死を納得するための装置となる。



靖国神社資料館（遊就館）

写真や遺品を飾られた人の名前の下には「命（みこと）」の字がつく。戦死した兵士たちはこのように靖国神社に祭られる「神」とされる。



動き出した民衆～多発する暴動の二面性

1905 講和条約反対運動（日比谷焼き打ち事件）

1906 東京電車値上反対運動

= 社会主義者と自由主義者の共闘

1908 増税反対市民大会

1912 第一次護憲運動

1913 対支問題国民大会

= 中国への強硬政策を要求

1914 シーメンス事件

1918 米騒動

1918～普通選挙権獲得運動

= インテリ＋労働組合＋政治家

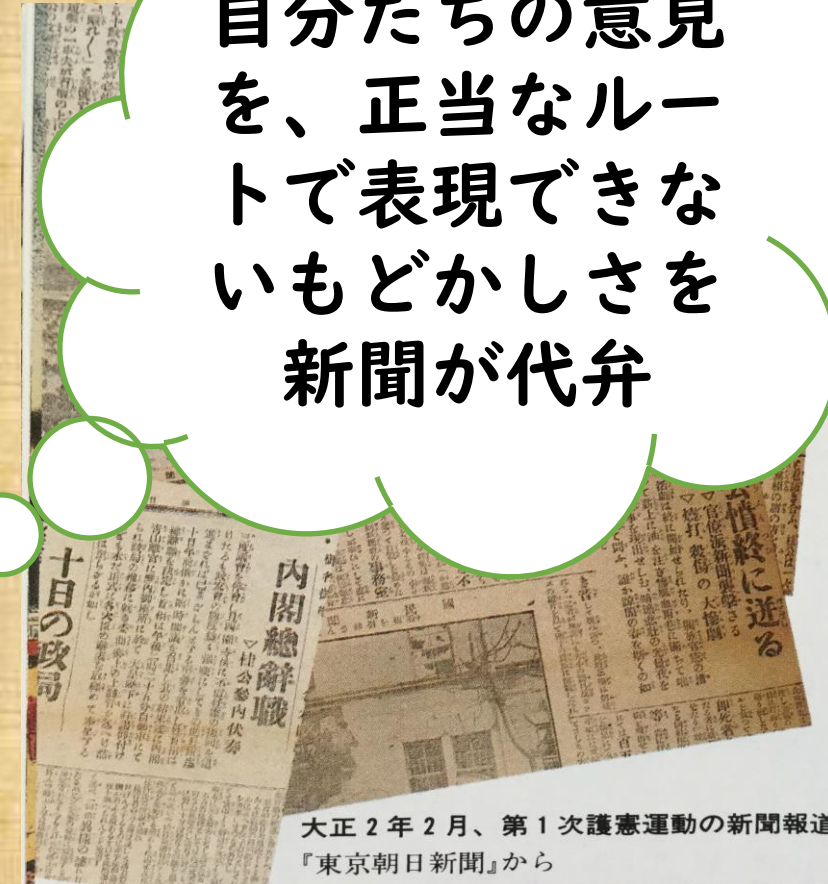


第一次護憲運動にともなう暴動で焼き打ちにされた上野署

民衆暴動の背景にあるもの 蓄積された不平不満とメディア

- ① メディアとくに新聞などが民衆運動を先導
⇒「腐敗宰相」「閥族」などの悪玉を新聞や論者が指摘、正義の「国民」あるいは懲らしめる「道德劇」を演出
- ② 背景…蓄積されている不平不満＝「息苦しさ」
重税・生活苦・社会的不公正・不自由さ・閥族政治
⇒「正当性」を付与する権威としての新聞など
⇒対象・方向性のあいまいさ（鬱憤晴らしの側面も）
- ③ 大阪朝日新聞…営業方針としての「反権力」?!
鳥居素川を主筆に抜擢（政論紙「日本」出身）
＋長谷川如是閑・大山郁夫
さらに吉野作造・河上肇らの記事を連載
→閥族政治批判、民本主義や社会政策などを主張

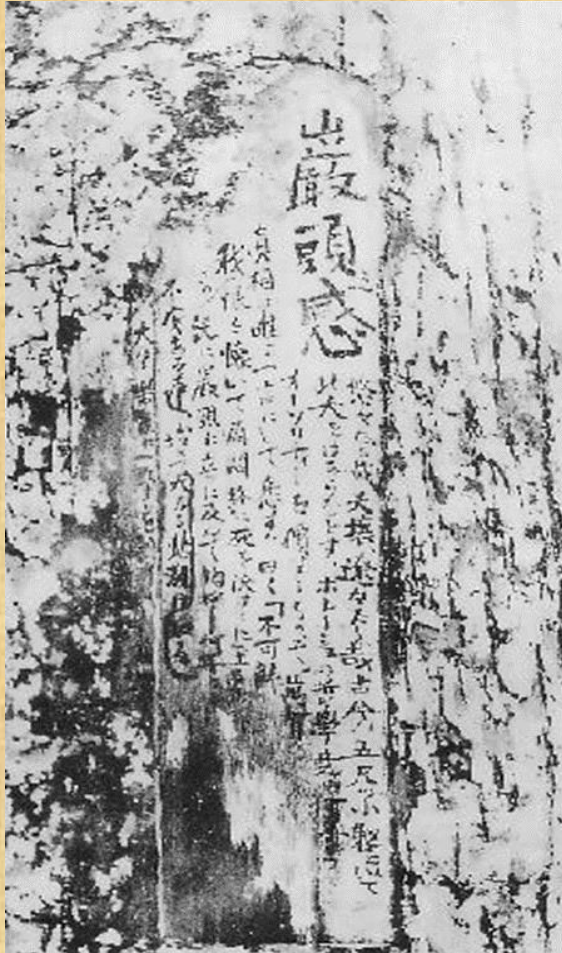
自分たちの意見を、正当なルートで表現できないもどかしさを新聞が代弁



第一次護憲運動を報じた新聞

社会構造の変化と「時代閉塞の現状」

～戊申詔書と大逆事件



社会構造の変化⇒多様な課題と要求の多様化

産業革命＝工業化の進行、都市への人口集中・大衆社会化など
さまざまな社会的課題が顕在化⇒多様な要求・運動が出現

- ・財閥（←政商）の出現→負債の削減
- ・都市への人口集中→食料・環境改善など都市政策の必要
旧中間層（「旦那衆」）の拡大
→各種料金引下・営業税の軽減など
- ・新中間層＝俸給生活者・自由業（記者・弁護士）など
職工・貧民（「雑業層」）⇒しだいに労働者が分離
- ・地方名望家（地主など「旦那衆」）
→地方の整備・開発（鉄道・道路・港湾）を期待
一般農民（自作農・小作農）→地租削減・小作料軽減
- ☆政友会…選挙権をもつ地方名望家の意見を重視
財閥や資本家からの資金援助
- ★大蔵省など…緊縮財政による負債の縮減
- ★軍部…軍備拡張など



都市貧民街…さまざまな仕事に従事する人びとが多く居住した。明治末～大正前半の騒動にはこうした地域の住民が多く参加した。

方向性を見失しまった日本

「世界の一等国」「文明国の一員」にはなったが

時代が行き詰まっているのに、まだ古いやり方で締め付けるんか。息苦しくてたまらん！

①日露戦争の勝利＝国家目標の喪失

- ・富国強兵＝「坂の上」をめざした時代、の終焉
- ・傷ついた兵士や、重税や生活苦にあえぐ民衆

②社会の変化、価値観の変化・多様化

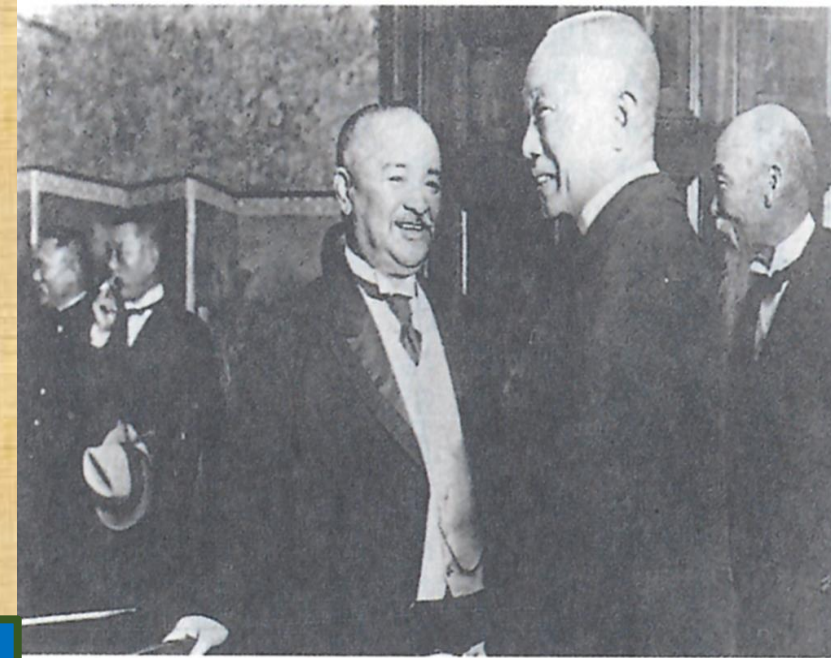
- ・産業革命の本格化・学校教育の定着・都市中心など
⇒既成の価値観（「国家」「家」中心）への疑問
⇒新たな価値観（個人主義・自由・平等・性差別への疑問…）

③強圧的な政治と上からの再統合＝旧来の価値観の強要

- ⇒桂園時代（「情意投合」）・戊申詔書・上からの民衆把握
⇒社会の閉塞感の広がり 自殺ブームなど

桂園時代※～妥協と暗闘の時代

- ① **第一次西園寺内閣**…桂の禅譲で成立。積極財政。
軍や官僚とは妥協的。社会主義※などには寛容
財政策や「**赤旗事件※**」などにより「毒殺」される
- ② **第二次桂内閣**…「**上からの国民統合**」をすすめる
韓国併合・**大逆事件**など⇒「**情意投合**」で協力確保
- ③ **第二次西園寺内閣**…政友会色の強化
陸軍二個師団増設問題で陸軍と対立崩壊
- ④ **第三次桂内閣**…政党や国民の反発
⇒2か月余で崩壊（大正政変）



桂太郎(左)＝陸軍大将
長州閥

西園寺公望(右)＝政友会
(伊藤の後継) 公家出身

☆桂は予算や政策を通すため政友会の協力で衆議院を抑え、
政友会は積極政策の実現と多数派維持のため桂に協力
☆他方での暗闘⇒第三次桂内閣＝大正政変で衝突。
★原敬の「軍隊的手法」による政友会内部のしめつけ

「上からの社会運動」の展開 国民再統合をすすめる

①靖国神社※・招魂社（護国神社）・忠魂碑

⇒戦争での犠牲者などを国家・地域の「神」として位置づける

⇒**在郷軍人会**…帰還兵に地域での名誉ある地位を与える

②上からの民衆把握

- ・**1908 戊申詔書**（←「教育勅語」の成人版）
- ・**地方改良運動**…「戊申詔書」にもとづく地域の立て直し
- ・「警察の民衆化」と「民衆の警察化」

青年団・在郷軍人会→各種自警組織の整備

→軍の影響力を地域にひろげる

③国家・天皇に敵対する勢力の「非国民」化

1900 治安警察法、1908 赤旗事件への厳罰対応

1910 大逆事件



忠魂碑

在郷軍人会などが中心となって献金を募集し、小学校の一角などに建立したものが多い。

戊申詔書 (1908)

- ①第二次桂内閣
(平田内相)のもと、**教育勅語の成人版**
として出された。
- ②日露戦争後の価値
観の多様化に対し、
新たな (古くさい?)
国家・道徳目標
を提示
- ③地方改良事業など
の展開
⇒「報徳運動」など

・戊申詔書 (現代語訳)

・ 今日、人文が日進月歩、世界の列国が互いに協同扶助して、その幸福と利益をともに享受している。朕(天皇)はますます国際的交誼をおさめ、友義をあつくし、列国とともにその慶福を享受しようと思う。

・ 考えると、日進月歩の世界の大勢に遅れないように進み、文明の恵沢を列国と一緒に得ようとするのには、言うまでもなく国家内部の国力増進発展に基礎を置かねばならない。内に国運発展がなくて、なぜ文明の恵沢を享受できるだろうか。

・ しかるに日露戦争から日も浅く、諸々の政治がますます更張するべき時である。この際、上下国内で心を一つにして、忠実にその業務を励み、勤勉儉約をして財産を治めて信義を守り淳厚な風俗を形作り、贅沢なうわべ飾りを避けて質素にし、心身の緩むことのないように互いをいさめあつて、自ら心を励まして活動しなければならぬ。

(下略)

地方改良運動と在郷軍人会

地域改良運動＝二宮尊徳に学ぼう（「報徳」運動）

内務省主導、「戊申詔書」にもとづく官製の「地域おこし」運動

⇒財政難のなか、地方の「自助」をもとめる

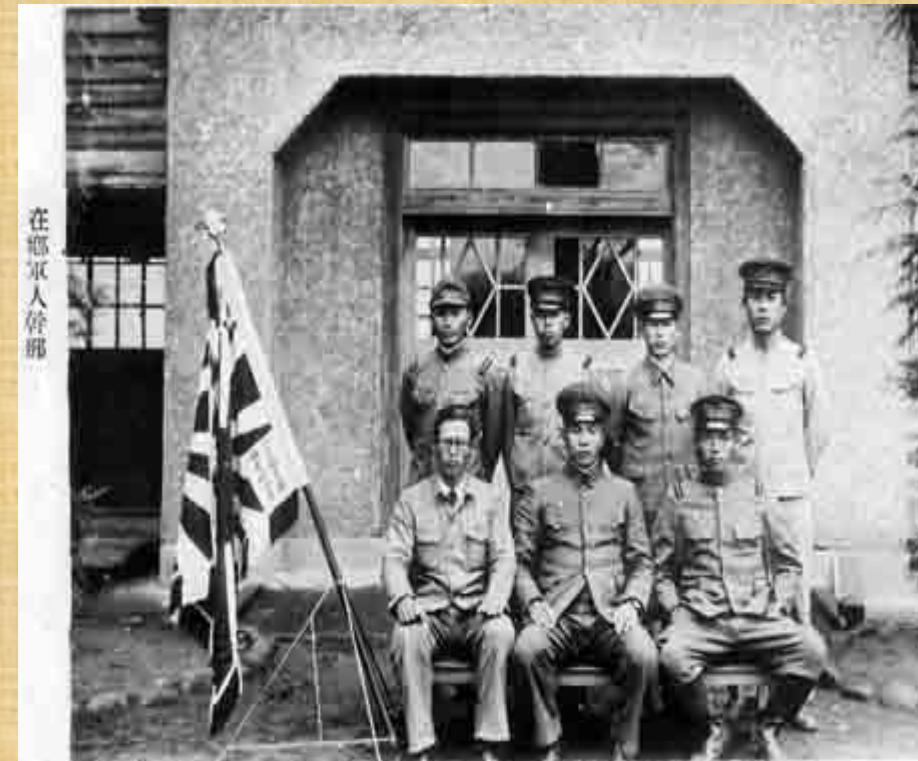
- ・旧町村単位の慣習や財産（入会地など）を行政町村中心に整理・統合
「一村一社」運動の強行⇒南方熊楠の抵抗
- ・米穀検査や蚕種統一など品質向上と生産増加
- ・産業組合による相互金融と共同購入共同栽培

在郷軍人会

地域社会で生活している予備役・後備役の
軍人を軍の下に組織化

⇒地域のなかに軍隊を根付かせる

＝「草の根の軍国主義」化をすすめる



目標を見失う明治日本

石川啄木『時代閉塞の現状』 (1910)



また一人の青年がいて、何らか重要な発明をしようとしているとします。しかしこんにちにおいては、一切の発明は実際のところ一切の労力とともにまったく無価値です——それが資本という不思議な勢力の援助を得ないかぎり。

わたしたち青年を取り囲む空気は、今やもうすこしも流動しなくなりました。強権の勢力は、あまねく国内に行わたっています。現代の社会組織はその隅々まで発達しています。——そうしてその発達がもはや完成に近い程度にまで進んでいることは、その制度の有している欠陥が、日一日明白になっていることによって知ることができます。

日比嘉高『超訳時代閉塞の現状二〇一四』

平民社解散～日本社会党

05年9月「直言」無期発行停止に

10月平民社解散⇒幸徳、アメリカへ(～06, 6)

牟婁新報記者として和歌山に⇒管野スガと出会う

06年1月 **日本社会党***結党

⇒電車賃値上げ反対運動に参加

4月 牟婁新報退社・上京/7月京都で管野と同棲

9月 電車賃値上げ反対運動で拘束される

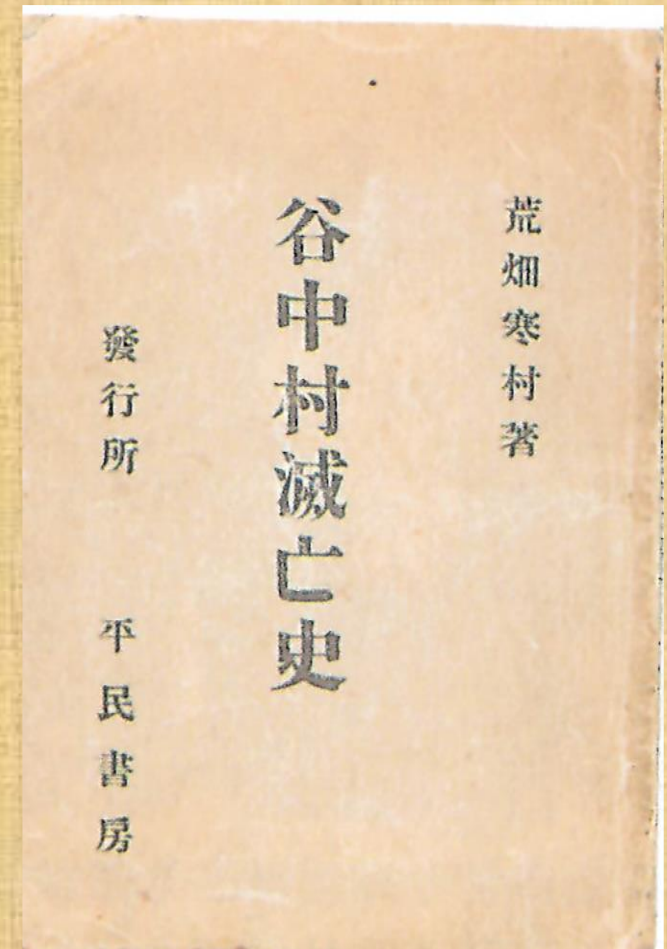
12月 日刊平民新聞記者に/管野上京、同棲

07年2月社会党大会、**幸徳の直接行動論**をめぐり紛糾

⇒結社禁止に

記者として谷中村取材⇒8月「**谷中村滅亡記**」出版

5月徴兵検査⇒海軍に入隊、即時除隊



足尾鉍毒事件を訴えるため
田中正造に依頼された荒畑
寒村が、谷中村が強制的に
破壊されるという事態に接
して、一気に書き上げたド
キュメンタリー

*日本社会党(1906~1907)

①1906年1月結成された日本平民党と日本社会党が、2月合併し成立した

合法社会主義政党

②「**国法ノ範囲内ニ於テ社会主義ヲ主張**」。

③唯物主義派中心、キリスト教社会主義派らも

④正式黨員は約200人、各地に支部を設け

多くの社会主義者が支えた。「**日刊平民新聞**」が事実上の機関紙

⑤**東京市電値上げ反対運動を展開**、市民大会を開催。

⑥アメリカから帰国した幸徳秋水がゼネストによる**直接行動論**を提唱、
田添鉄二ら**議会政策派**と対立

⑦山県有朋らの圧力を背景に、西園寺内閣から1907年2月結社禁止



赤旗事件から大逆事件に

08年6月 **赤旗事件***

⇒ 第一次西園

8月 荒畑

7月 幸徳

09年3月 幸徳、

⇒ 幸徳ら雑

⇒ 荒畑、管

10年 2月 荒畑

⇒ 5月 幸徳・管野の殺害を計画、湯河原へ

5月 大逆事件の検挙始まる ⇒ 幸徳・管野ら逮捕

⇒ 荒畑・桂首相暗殺を計画するが失敗

日本社会党(1906~1907)

① 1906年1月結成された日本平民党と日本社会党が、2月合併し成立した

合法社会主義政党

② 「国法ノ範囲内ニ於テ社会主義ヲ主張」。

③ 唯物主義派中心、キリスト教社会主義派らも

④ 正式黨員は約200人、各地に支部を設け

多くの社会主義者が支えた。「日刊平民新聞」が事実上の機関紙

⑤ 東京市電値上げ反対運動を展開、市民大会を開催。

⑥ アメリカから帰国した幸徳秋水がゼネストによる直接行動論を提唱、田添鉄二ら議会政策派と対立

⑦ 山県有朋らの圧力を背景に、西園寺内閣から1907年2月結社禁止



秋水(1871-1911)

明治時代の社会主義者。中江兆民に師事。無政府主義思想をいだく。明治43年天皇暗殺計画の首謀者として検挙され44年1月処刑された。41歳。高知県出身。本名は伝次郎。

*赤旗事件(1908、6、22)

東京・神田の錦輝館での山口義三出獄歓迎会にさいし、
幸徳秋水の直接行動論を支持する大杉栄、荒畑寒村らが、

「無政府共産」「無政府」の文字を白テープで縫い付けた2本の
赤旗を翻し、革命歌を歌い、無政府主義万歳を叫び、場外に出た
ところ、旗を巻けと命ずる警官隊との間で乱闘となった。

大杉、荒畑、堺利彦、山川均、管野スガラ16人が検挙され、厳
罰にあった事件

⇒元老・山県有朋らは、第一次西園寺内閣の対社会主義政策を攻
撃、内閣辞職においこみ、第二次桂内閣に変わる。

⇒他方、社会主義者への迫害の強化が、管野ら直接行動派を急進
化させ、大逆事件を引き起こす要因となる。



大逆事件(1)～宮下事件と幸徳らの大量検挙

- ① 管野スガ*、宮下太吉、新村忠雄、古河力作らによる明治天皇暗殺謀議。
- ② 宮下による爆裂弾を製造・実験。
- ③ 当局の察知。1910年5月宮下逮捕を手始めに、管野の夫・幸徳秋水らも逮捕。
- ④ 社会主義運動の撲滅をねらい、
 - 1) 大石誠之助らの紀州派、
 - 2) 松尾卯一太らの熊本派、
 - 3) 武田九平らの大阪派、
 - 4) 森近運平、奥宮健之、内山愚童ら計26名を起訴
- ⑤ 押収した住所録などから全国社会主義者数百名を検挙して捜査。



幸徳秋水と管野スガ

*管野スガ【かんのすが】

1881-1911(明治14-44)

明治の社会主義者，無政府主義者。大阪出身。筆名須賀子。号は幽月。

離婚後《大阪新報》の記者となり，林歌子の知遇をえて上京，社会主義思想に近づき1904年平民社に堺利彦を訪れる。その後紀州田辺の《牟婁新報》に入り，荒畑寒村を知り結婚。

赤旗事件に連座したが無罪。幸徳秋水の影響でアナキストになり，一時同棲。

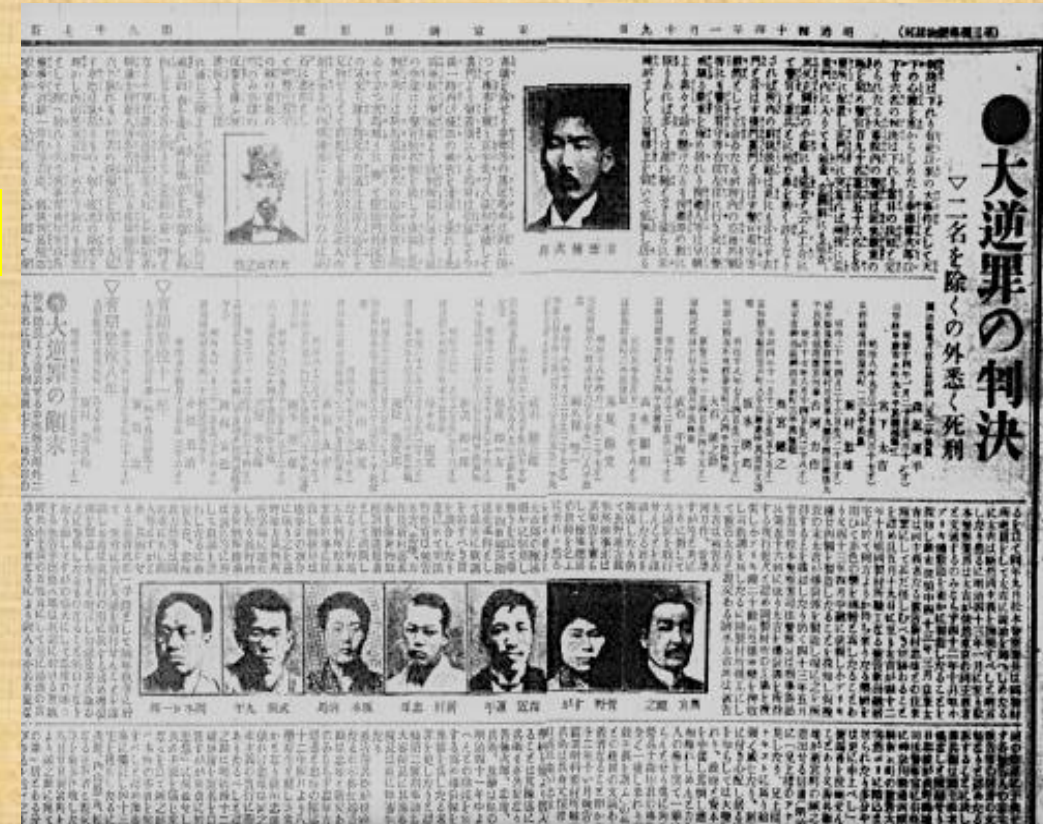
1910年宮下太吉らと天皇暗殺を企てたことを理由に捕えられ，翌年幸徳らとともに刑死（大逆事件）



大逆事件(2)～大量処刑

- ① 10年12月10日から大審院での非公開裁判,
- ② 11年1月18日 24名に大逆罪※で死刑判決
- ③ うち12名を天皇の恩赦で無期懲役に減刑,
- ④ 幸徳秋水, 宮下太吉, 管野スガら12名
1月24～25日処刑。
- ⑤ 幸徳が謀議に関係していたか疑わしい
- ⑥ 他の21名はまったく無関係。

※大逆罪… 旧刑法第73条に規定された皇族に対して危害を加え、加えようとすることによって成立する罪。刑罰は死刑のみ。
昭和22年(1947)の刑法改正により廃止。



大逆事件と荒畑寒村

- ①桂首相暗殺を計画するが、警戒が厳重で実行できず
- ②出会った女性の援助で身を隠す
- ③幾度か処刑前に彼女と会って今生の別れを告げたいと思いつい、ついに決行できない。
- ④処刑後、管野の遺骸をひきとった家にいったが
「どうしてもそれ（遺骸）を見る勇気がなかった」
- ⑤事件に対して
「歴代政府の社会主義に対する伝統的な弾圧、なかんずく赤旗事件の被告に対する過酷な刑罰、その後の苛烈深刻な迫害にたいする復讐の心理的反発」「絶望的な人間感情の爆発」

とくに管野スガの「自己嫌悪」「厭世的な、悲劇的な、あるいは絶望的な観念」と浅からぬ関係を持つ



大逆事件の嵐の中で潜伏中の
荒畑寒村

社会主義「冬の時代」に

「大逆事件以後、吹きすさぶ真っ黒な反動の嵐の中に運動はまったく火が消えたようで、真に同盟半ば散じ、半ば枯骨の感なきを得なかった。この空白期間は第一次世界戦争の末期まで続き、その間における政府の圧迫はほとんど正気の沙汰とは思えなかった。」(寒村自伝)

「社会」という文字の不使用（例：「昆虫社会」
泥棒や放火⇒「社会主義者か、鮮人か、不逞の

時代閉塞！

- ・ 西川光二郎⇒転向
- ・ 堺利彦「売文社」設立
 - ①新聞・雑誌・書籍の原稿制作
 - ②外国語の翻訳
 - ③意見書・報告書など一切の文章の立案・代作・添削
- ・ 荒畑…新聞社への就職と妻の内職でしのぐ

大逆事件とその影響

徳富蘆花「叛逆論*」

- ・兄、蘇峰を通し、さらに新聞紙上で助命を嘆願。
- ・一高で学生の願いに応じ「叛逆論※」を講演。

石川啄木

- ・裁判記録を入手、無実を確信、社会主義に接近
- ・『時代閉塞の現状※』で「強権」の社会支配を批判。

永井荷風

「以来わたしは自分の芸術の品位を江戸戯作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した」

※夏目漱石「こころ」のKのモデルは幸徳秋水？

国際的な反響…欧米の社会主義者も日本政府に多数の抗議電報などを送るなど、抗議運動を展開した



徳富蘆花



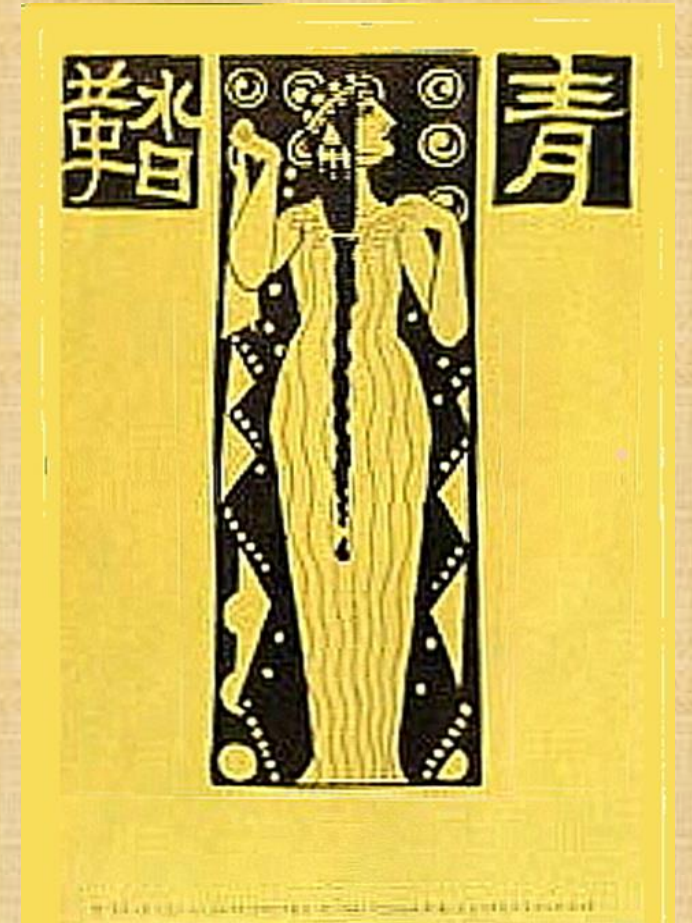
*徳富蘆花 『謀叛論』 (1911)

彼らは乱臣賊子の名をうけても、ただの賊ではない、志士である。ただの賊でも死刑はいけぬ。まして彼らは有為の志士である。自由平等の新天新地を夢み、身を献げて人類のために尽さんとする志士である。その行為はたとえ狂に近いとも、その志は憐れむべきではないか。

彼らはもと社会主義者であつた。富の分配の不平等に社会の欠陥を見て、生産機関の公有を主張した、社会主義が何がこわい？ 世界のどこにでもある。しかるに狭量神経質の政府は、ひどく気にさえ出して、ことに社会主義者が日露戦争に非戦論を唱うるとにわかに圧迫を強くし、足尾騒動から赤旗事件となつて、官権と社会主義者はとうとう犬猿の間となつてしまった。

諸君、最上の帽子は頭にのっていることを忘る様な帽子である。：帽子は上にいるつもりであまり頭を押つけてはいけぬ。我らの政府は重いか軽いか分らぬが、幸徳君らの頭にひどく重く感ぜられて、とうとう彼らは無政府主義者になつてしまつた。

明治の終焉と新時代の社会運動へ ～『白樺』『青鞥』の時代～



明治天皇の死去と大正の開始

「明治」が終わり、強迫神経症的呪縛から解放された？

- ① 1912年7月29日 明治天皇死亡、大正時代
⇒ 自粛ムードの広がり＝株価大暴落、皇居前
⇒ マスコミの過剰報道

② 乃木大将の殉死 「国家の生存に危険を及ぼすこと甚しい悪行為」(桐生悠々) 「愚挙・蜚風」(朝日)

③ 漱石 「明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました」(『こころ』)

④ 「フタのようなものがとれた」「ふしぎに世の空気が明るく。軽く感じてきた」(添田知道)

「なにかこう弾んだ気持ち」(徳川夢声)

⇒ 明治（時代・天皇）への様々な思いと、
時代の抑圧からの解放感と新しい時代の期待感

明治天皇の死＝新旧両思想の対立 ～「歴史思想」と「新来思想」

「(明治)40年代はいわゆる新道徳の精神と歴史的国民思想とが…真剣勝負をするようになった。

一方は、個人の権威、人格の尊重・主我・権利。

一方は、忠・孝・没我・義務」

(倫理学者藤井健治郎)



教育勅語や戊申詔書などで伝統思想を
国民に説いた明治天皇の死は、
振り子を新思想の側に大きく傾けた。(坂野潤治)



晩年の明治天皇
天皇は社会主義に危機感
を持ち、戊申詔書などにも
積極的であった。

新しい時代の幕開け ～第一次護憲運動と大正政変

明治の政治
は、終わりに
しようぜ！

①第二次西園寺内閣下での陸軍の2個師団の増設要求

⇒1912年、陸軍の策動での西園寺内閣崩壊

「陸軍の横暴」「内閣毒殺」との声たかまる

③藩閥ボスの山県が陸軍大将・桂太郎を推薦

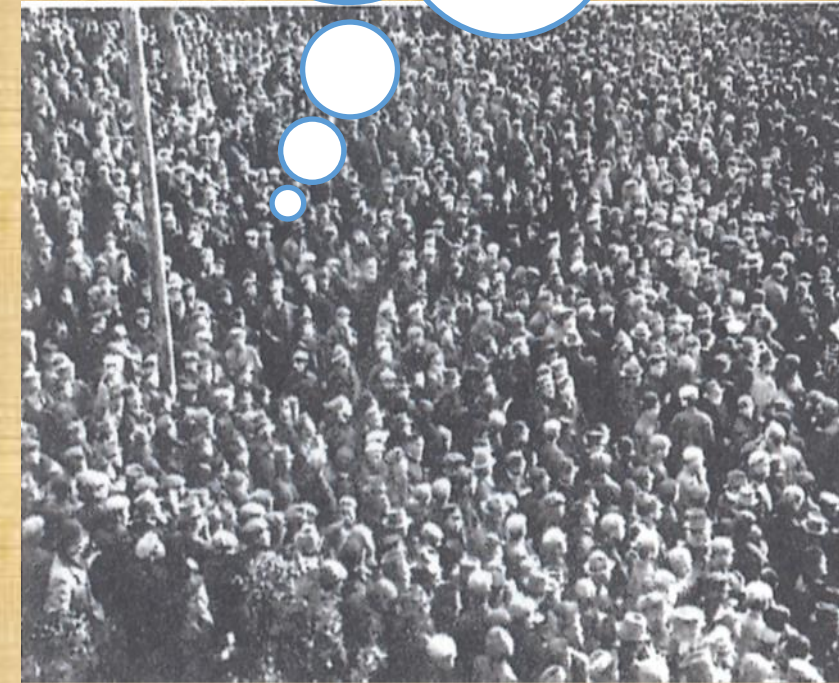
⇒桂、「勅語」を用いて組閣

④護憲運動の全国化＝民衆運動と政党政治の結合

⇒数万の民衆が議院を包囲⇒桂内閣崩壊

⑤新しい時代＝「大正」を印象づける

・民衆の力で内閣を倒した。天皇の権威の低下



国会周辺に集まった群衆

「明治の精神」への異議申し立て 『白樺』と武者小路実篤

①1910(明治43)『白樺』発刊

おもに学習院に学ぶ上流階級の二代目たちが発刊

国家をものともせず「**自分勝手なもの**」=精神世界の華麗な展開を実現する

かれらが主張したのは「個人の権威の確立、ことに**国家を卑小なものとし個人を至高のものとする認識であった**」(鹿野政直)

②武者小路実篤＝「自己を生かす」思想

「**自己の如く隣人を愛する**といったって、第一**自己を愛することを知らねば始まらない**」

強烈な自己肯定の精神⇒国家至上主義に対抗する



『白樺』創刊号(1910)
「白樺は自分たちの小さな力で
つくった小さな畑である。自分
たちはここに互いの許せる範囲
で**自分勝手なもの**を植えたいと
思っている。」

「明治の精神」への異議申し立て 『青鞥』の発刊(1911M44)

『青鞥』…知識階級の若い女性による、女性自身による文学集団として発足。

創刊号…長沼(高村)智恵子の表紙・与謝野晶子の詩「そぞろごと」、平塚らいてうの巻頭言

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。
今、女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。平塚らいてうの巻頭言(「青鞥宣言」)

青鞥のめざしたもの…「他によって生きる」状態からの女性の解放、「潜める天才」の発揮。(鹿野)

世間からは、一種の“悪魔”の出現とみなされ、
「新しい女」との蔑称をうけ、関係者は抑圧を受ける



『青鞥』創刊号(1911年)
山の動く日来る
かく云へども人われを信ぜじ
山はしばらく眠りしのみ
その昔において
山は皆火に燃えて動きしものを
されど、そは信ぜずともよし
人よ、ああ、ただこれを信ぜよ
すべて眠りし女
今ぞ目覚めて動くなる
(与謝野晶子)

「明治の精神」への異議申し立て 平塚らいてう「新しい女」

わたしは新しい女である。(中略)

新しい女はもはやしいたげられる古い
女の歩んだ道を黙々として、はた唯々
として歩むに堪えない。

新しい女は男の利己心のために無智に
され、奴隷にされ、肉塊にされた如き
女の生活に満足しない。

新しい女は男の便宜のためにつくられ
た古き道徳、法律を破壊しようと願っ
ている。

(中央公論T21号)



平塚らいてう 1886～1971
日本女子大卒、「三四郎」の
美禰子のモデルといわれる。
漱石の弟子森田草平との心中
未遂事件ののちの苦境の中で、
自らの結婚資金を原資に雑誌
「青鞥」を発刊した。

普通選挙権獲得(普選)運動

政治を「国民」のものとするために
国民の意見をできるだけ正確に反映する選挙制度としての
普通選挙制度要求が発生。

①普通選挙権…納税額などの制限がなく、全員が一票の権利を行使できる選挙制度

②日清戦争後、民権運動の流れを引く人びとや社会主義者の中から発生

③第一次護憲運動(1912)やシーメンス事件(1913)

⇒いかに国民の意見を政治・議会に反映させるかが課題に

④1919～普選運動の高揚＝広汎な層を巻き込む
連日1万人の大集会(東京)、34府県での開催



普通選挙期成関西労働同盟
のデモ、集会は中之島公園
で行われた。
中央左は尾崎行雄

友愛会の結成と鈴木文治

①友愛会…キリスト教社会改良主義の社会運動家
鈴木文治が労働者の共済修養団体として結成

- ・1912年3月 教会内に労働者倶楽部を開設

→集まった労働者との歓談＝友愛会結成の気運高まる

- ・8月1日（明治天皇死亡の翌々日）友愛会を結成

→20数名参加（⇒会員15名）畳職・電機工・牛乳配達人など

②鈴木…窮乏体験・キリスト教信仰・社会政策研究を通じて社会の不合理性を自覚

「労働者の虐げられた境遇に深く同情…日本の労働者の地位を改善するには穏健な労働組合」が必要、
「そのことにより階級闘争の激化を防ぐことができる」（松尾尊兌66）



鈴木文治(1885～1946)
宮城県生れ。吉野作造と同郷。幼少時にキリスト教に入信、苦学ののち東京帝大卒業。朝日新聞社を経てユニテリアン派の伝道団体で社会事業に着手、45年に同志15名で友愛会を結成。左派の台頭に対して労働組合主義を堅持、1930年まで終始友愛会・日本労働総同盟の会長職にとどまった。

友愛会の発展

～労働者の人格と社会の構成員であることの承認を要求

①「貧富の大きな格差の中で、富の程度だけでなく、知能・才能・品性・健康などすべてにわたり劣るとみなされ、世の中から頭ごなしに『職工風情』と罵られる軽蔑を取り除くこと、そのために団結して切磋琢磨し…工場主・資本家と同じ人間としてみとめられること、それがかれらの目標だった」「一個の人間として人格の承認を求め、対等の社会の構成員であることを主張しなければならなかった」(武田晴人)

②実際の活動…労働争議の調停という形で、合法的な支援を行う
＝成功体験は団結権・争議権のない労働者・争議団から感謝された

③会員の増加…15人(結成時)→1326人(13/7)→2000人・地方支部3(14/11)→6500人・地方支部13(15/6)

支部＝地方名士や会社幹部が長、役付きの熟練工が中心＝平沢計七・松岡駒吉ら

荒畑寒村らの再出発

「近代思想」(明治45年7月計画、大正元年10月創刊)

①大杉と荒畑「文芸や思想上の抽象的な問題を論ずる雑誌を発刊し、離散隠遁している同志が再起する中心を作りたい。」

三千から五千、「発行部数は少なかったが世間の受けは良かった」

②「日本百科大全集」(亀井秀雄執筆)の記述より

「冬の時代」に、社会主義者の拠点として、大杉栄が編集兼発行人、荒畑寒村が印刷人となって発行した。(1期 ~14年9月)

堺利彦、高畠素之、土岐善麿らが執筆し、マックス・スティルナー、クロポトキン、ウェデキントなどの思想を紹介して、大正中期から昭和にかけての人間観の変革の準備をなした。(中略)

雑報欄のエッセイ、文芸時評、書評なども、歯に衣きせぬ偶像破壊的な発言で文壇に新しい空気窓を設けようとし、初期『文芸春秋』の編集形態の先蹤となった。(2期 15年10月~16年1月)

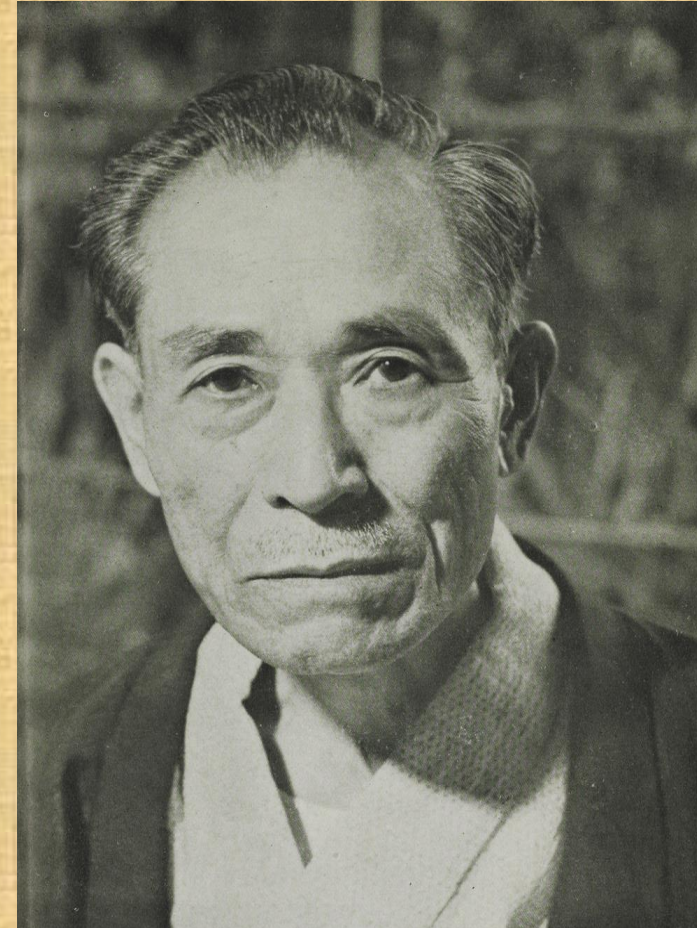
明治生まれの「馬鹿者」「わかもの」 荒畑寒村

- 1) 平民社時代から社会主義運動にかかわる
- 2) 足尾鉾毒事件にかかわり「谷中村滅亡史」を出版
- 3) 大逆事件で処刑された管野スガ(須賀子)の元夫
- 4) 「冬の時代」に大杉栄と「近代思想」を発刊
- 5) 第一次日本共産党創設に関与、ソ連に向かう
- 6) 堺利彦・山川均らと『労農』を創刊

非共産党系マルクス主義の立場で活躍

- 7) 人民戦線事件で逮捕⇒敗戦は牢獄で迎える
 - 8) 戦後は日本社会党結成に尽力、衆議院議員
- 以後、主に著述業に従事「寒村自伝」の評価は高い

理想主義・人道主義のない社会改革なんてつまらん



荒畑寒村（勝三）
1887（M20）～
1981（M56）

参考文献

『荒畑寒村著作集1・9（寒村自伝）』『週刊平民新聞（復刻版）』
伊藤整編『日本の名著・幸徳秋水』塩田庄兵衛『日本社会運動史』
隅谷三喜男『日本の歴史22大日本帝国の試練』
海野福寿『日清・日露戦争』武田晴人『帝国主義と民本主義』
坂野潤治『近代日本の出発』成田龍一『大正デモクラシー』
小松裕『「いのち」と帝国日本』『田中正造』
鹿野政直『大正デモクラシー』中村政則『労働者と農民』
松尾尊兌『大正デモクラシー』『大正デモクラシーの研究』
金原左門編『日本民衆の歴史7』
東海林・菅井『通史・足尾鉍毒事件1877～1984』
由井正臣『田中正造』
有山輝雄他『メディア史を学ぶ人のために』
アンドルー＝ゴードン「」